

(寄稿)

## 有明海再生の道



松尾漁業協同組合代表理事組合長  
有明海区漁業調整委員長  
熊本市水産振興協議会会長  
黒田 正明

私は漁業者であり、海苔生産者の一人である。2年前に、未曾有の海苔不作が報じられ、多くの漁業者が諫早干拓地に詰め掛けたことは記憶に未だ新しい。

有明海のこうした惨状にはいくつかの原因があるだろうが、一つに的を絞れる程、単純なものではないはずである。有明海に注ぐ大小の河川から流れ出す様々な排水やヘドロもそうであろうし、漁業者における活性剤処理も少なからず、海に負荷をかけている事は間違いない。また、地球温暖化もこれらの生態系を崩す事に十分な材料を備えている。

今、有明海は、富栄養化と呼ばれるリンや窒素の宝庫でもある。これは人間がその生活に利便性を求める限り増えつづける。私自身も決して、公共事業を良しとは思わないが、有明海再生への道は、こう

した原因究明とその再生論を別に考えなければ、前に進まないのではないかと懸念を抱く。

人々が自然破壊を憂い、漁業の閉塞感を嘆く事は当然であるが、先ずは全ての人々が有明海を含めた全ての、現実の自然と、真剣に対峙しなければ、その道は開けないものと解釈する。こうした一連の惨状に、加害者や被害者と言った枠組みを作り、そうした範疇の中で、幾度にわたり議論をしても、それは結果として不毛である。

有明海再生の道は、個々人の意識の変革が第一歩である。荒廃した有明海において、何をなすべきか。また何が出来るのかということ熟慮すれば、そこから導かれる答えは、少なくとも一歩前進ではなかろうか。

我々にとって、一番留意しなければならないのは、目に見える公共事業でもなければ、海底に堆積するヘドロでもない。有明海が個人の財産であるという錯覚にある。この眼前に広がる海は、ここに生活の糧を求める人々、全ての共有の財産である。だからこそ、海を保全し、そこに共存共栄の構図を作る必要があると考える。荒廃した有明海は、一つの原因に拠るものではない。この現象を、自然からの警鐘と捉えられるかどうか、現在問われているのである。

(速報)

## ISEMMM' 2002に参加して

2002年9月1日～5日、ウィーン大学に38国から130名の研究者が集まり、微古生物学、微生物学および小型底生生物の環境科学への適用についての会議(第3回International Congress "Environmental Micropaleontology, Microbiology and Meiobenthology")が開かれました。九州の大学関係者5名が参加し、オホーツク海、松島湾、諫早干拓

地および八代海の環境変化、貝毒の原因になる鞭毛虫の歴史について発表しました。

9月6日～9日、Johann Hohenegger教授、Romana Melis教授、Peter Pervesler教授およびNevio Pugliese教授の案内で、イタリア北部のトリエステ湾の見学をしました。ここでは、漁民の毛髪から高濃度の水銀が検出されています。汚染の原因は、隣国のスロベニアにある水銀鉱山(10年前に閉山)から、湾にそそぎこむイソンゾ(Isonzo)河への流出



底生生物の説明をする Pervesler 教授



河口に広がる干潟を観察する参加者